

出品作家略歴

【生誕 130 年 村山槐多】

村山槐多（むらやま・かいた、1896-1919）

神奈川県生まれ（愛知県説もあり）。京都で幼少期を過ごす。中学時代に、従兄の山本鼎の影響を受けて絵画の創作をはじめ、文学と美術で早熟の才能を発揮する。1914年に上京、小杉未醒宅に寄寓し、日本美術院研究所に入所、洋画を学ぶ。同年の第1回二科展で《庭園の少女》などが入選を果たすと、1915年の第2回日本美術院展で《カナナと少女》、1917年の同第4回展では《乞食と女》で院賞を受賞、院友に推挙される。放浪と退廃の生活を送り、結核に冒され夭折した。

山本鼎（やまもと・かなえ、1882-1946）

愛知県生まれ。従弟は村山槐多。東京美術学校で学び、卒業後の1907年に石井柏亭らと雑誌『方寸』を創刊する。1912年渡仏、国立美術学校で学び、小杉未醒らと各地を旅行する。帰国後は日本美術院同人に推薦され、1918年には創作版画協会を結成。1920年に日本美術院を脱退すると、その2年後小杉や梅原龍三郎らと春陽会を設立する。リアリズムを標榜し創作版画の分野を確立、また児童画教育や信州を拠点とした農民美術運動では中心的な役割を担った。

石井鶴三（いしい・つるぞう、1887-1973）

東京生まれ。父の鼎湖、長兄の柏亭はともに画家。不同舎に入り小山正太郎に学ぶ。東京美術学校へ進み、1911年の第5回文展に入選。同校研究科を修了したのは日本美術院研究所で学び、1915年の再興第2回院展に《力士》を出品し院友となる。日本美術院を中心に彫刻家として活躍する傍ら、創作版画運動や春陽会の創設に携わり、新聞小説の挿絵も手掛けるなど多彩な活動が知られる。日本版画協会会長、東京美術学校教授を歴任し、また長野県内の彫塑・絵画講習会で長年指導にあたった。

山崎省三（やまざき・しょうぞう、1896-1945）

神奈川県生まれ。幼少期に父を亡くし、母の実家がある新潟で育つ。1908年北海道に移住、1915年に上京し、

日本美術院研究所で小杉未醒、山本鼎に師事。1918年の院展試作展で奨励賞金賞、翌年も甲賞となるが1920年に院展を脱退。友人の村山槐多が没した後はその顕彰に奔走し、1921年『槐多画集』を編集する。1922年の春陽会創立に参加、1929年に渡欧を果たし、1937年からは新文展に出品。山本とともに児童画教育や農民美術運動に携わり、北海道における洋画の普及にも貢献した。

【生誕 160 年 中村不折】

中村不折（なかむら・ふせつ、1866-1943）

江戸生まれ。本名は鉦太郎。幼少期に母の郷里である長野県高遠（現・伊那市）に移る。飯田で河野次郎に絵を学び触発され、1888年に上京。小山正太郎の画塾・不同舎に入り、画技を磨く。1901年渡仏し、翌年からアカデミー・ジュリアンでジャン＝ポール・ローランスに学ぶ。帰国後は太平洋画会会員となり、1907年には第1回文展審査員に任命される。神話や伝説を題材にとった裸体画を得意とする一方で書家としても知られ、収集した書道資料を展示する「財団法人書道博物館」を開設した。

【新収蔵 南画家・長井雲坪】

長井雲坪（ながい・うんぺい、1833-1899）

越後国（現・新潟県）生まれ。本名は元。通称は元次郎。別号に桂山、瑞岩など。1848年、長崎で鉄翁祖門、木下逸雲に南画を学ぶ。1867年から一年ほど清国に渡り画技を磨く。帰国後、各地を遍歴し信州に入る。北信地方各地に仮寓し、南画研究のため戸隠山中に籠った。下山後、善光寺近くの家に「玉蘭堂」と名付け、晩年を過ごした。

【信州の刀工】

宮入行平（みやいり・ゆきひら、1913-1977）

長野県埴科郡坂城町生まれ。本名堅一。1937年、24歳で上京し、栗原彦三郎昭秀が主宰する日本刀鍛錬伝習所に入所。戦時中は陸軍の指定工として軍刀製作も手がけた。戦後は様々な伝法を試み、最終的に相州伝、特に幕末郷土の名工源清麿や南北朝期の志津兼氏の作風を探求し、現代相州伝の上工として一時代を築いた。1963年、長野県で初めて国の重要無形文化財「日本刀」

保持者（人間国宝）に認定された。

山浦真雄（やまうら・まさお、1804-1874）

信濃国小県郡赤岩村（現・長野県東御市）生まれ。上田藩の刀工河村寿隆に師事し、実用刀剣の道を志して独自に鍛錬の技を磨き、地元小諸藩の藩工となる。さらに上田藩主松平氏の要請により上田城下へ移り、1853年にはその名声によって松代藩のお抱え工となり、士分に取り立てられた。幕末の信州を代表する刀工であり、弟の源清麿をはじめ多くの名工を育てた。銘は完利・寿昌などに始まり、のちに正雄・真雄、晩年は寿長と切った。

宮入法廣（みやいり・のりひろ、1954-）

長野県埴科郡坂城町生まれ。父は刀工宮入清宗、伯父は人間国宝宮入行平。1978年、國學院大學文学部卒業後、人間国宝隅谷正峯に師事し備前伝を学ぶ。1984年に独立し、坂城町で父とともに作刀に専念。新作名刀展で特別賞8回受賞、1995年に最年少無鑑査に認定。2011年、長野県無形文化財。近年は相州伝や正倉院刀子の復元にも取り組む。

【『名品選』から】

満谷国四郎（みつたに・くにしろ、1874-1936）

岡山県生まれ。上京後小山正太郎の画塾・不同舎に入門する。1900年、丸山晚霞らと共に渡米、各地で展示会を開催したのち渡仏する。パリではアカデミー・ジュリアンでJ.P.ローランスに師事し、パリ万博に出品した《蓮池》で銅牌を受賞。帰国後は1902年に太平洋画会を創立、1907年の東京勸業博覧会では《かりそめのなやみ》が1等賞を受賞する。1911年、大原孫三郎の支援により再渡欧する。文展や定点の審査委員を歴任し、1925年、帝国美術院会員となる。

藤島武二（ふじしま・たけじ、1867-1943）

鹿児島県生まれ。上京後暫くして洋画に転向、山本芳翠らの指導を受ける。1895年内国勸業博覧会で《御裳濯川図》で褒状を獲得、翌年白馬会の創設に携わる。1905年渡欧、パリの美術学校で学び、イタリアではカロリュス＝デュランに師事する。帰国後は東京美術学校教授に就任、1912年には本郷洋画研究所をと設立する。翌

年《うつつ》が文展で3等賞を受賞、以降文展や帝展の審査委員を務め、1924年帝国美術院会員となる。1937年、第1回文化勲章を受章。

清水多嘉示（しみず・たかし、1897-1981）

長野県諏訪郡原村生まれ。当初は洋画家を志し、二科展などに出品。1923年にフランスへ渡り、A.ブールデルに彫刻を学ぶ。滞仏中にサロン・ドートンヌに入選。帰国後は刻画会展や新文展などに出品を重ねる。戦後は日展に出品したほか、多くの屋外彫刻作品を手掛ける。1953年に芸術選奨文部大臣賞、翌年には日本芸術院賞を受賞、1980年、文化功労者。日本芸術院会員、日展顧問などを務めたほか、武蔵野美術大学教授として後進の指導にもあたった。

【新収蔵 上野誠とひとミュージアム上野誠版画館】

上野誠（うえの・まこと、1909-1980）

長野県更級郡川中島村（現・長野市川中島）生まれ。東京美術学校図画師範科に入学するも、学内の改革運動への参加と検挙により退学処分を受ける。この頃から木版画の制作を開始し、1936年の国画会展で初入選を果たす。戦中にかけて教員として働く傍ら制作を続け、1948年には日本美術会会員となる。翌年、日本版画運動協会に加わると、1952年に美術家平和懇談会（現・美術家平和会議）を結成する。1955年、日本美術家連盟会員、1958年、日本版画協会会員。1959年のライブツィヒ世界平和運動十周年記念国際版画展で〈ヒロシマ三部作〉が金賞を受賞した。

ケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）

旧ドイツ・ケーヒスベルク生まれ。ベルリンとミュンヘンの女子美術学校で学び、マックス・クリンガーの影響で素描、版画の道へ進む。1899年のドイツ美術展で『織工の蜂起』がメダルを獲得、同年ベルリン分離派に加わり、後に自由分離派を結成する。1904年にパリへ向かい、アカデミー・ジュリアンで彫刻を学ぶ。1907年、ヴァイラ・ロマーナ賞を受賞、1919年には女性として初めてプロイセン芸術アカデミー会員に任命される。労働者や反戦、家族を主題とした作品制作を貫き、晩年は反ファシズムの姿勢から発表の場を制限された。

小野忠重（おの・ただしげ、1909-1990）

東京生まれ。早稲田実業学校在学中に創作版画に触れ、本郷絵画研究所へ通う。1929年に第2回プロレタリア美術展に出品、1932年には新版画集団を結成、機関誌『新版画』を発行する。1937年、新版画集団の後継となる造形版画協会を創立する。戦後は新制作派協会展や日本アンデパンダン展などへの出品と並行して、版画史や技法に関する著書を多数手掛けた。1979年、紫綬褒章を受章。労働や貧困をモチーフとした社会主義的な表現から始まり、黒の画面を地として色版を刷り重ねる陰刻法を用いた、重厚な画面の風景描写へと至った。

小口一郎（こぐち・いちろう、1914-1979）

栃木県生まれ。上京後は職を転々とする中で、23歳ころから洋画家として活動、1943年の白日会展で入選を果たす。1946年、日本美術会北関東支部に参加し、翌年の新構造社展で特選、会員に推挙される。鈴木賢二の勧めで木版画制作を始め、1950年に日本版画運動協会会員となる。日本アンデパンダン展や平和美術展への出品を続け、1965年に日本美術会栃木県支部を結成する。1970年、インターグラフィック'70（東ドイツ）で受賞。足尾銅山の鉱毒被害事件を扱った晩年の木版画三部作は今なお高い評価を受けている。